



**JAF Grand Prix
FUJI SPRINT CUP 2011
Race Report**

▽11月11日(金)～11月13日(日) 富士スピードウェイ (静岡県) | コース全長 : 4,563m

・11月11日(金) 公式練習 09:30 - 10:30 | 第一レース公式予選一回目 13:50 - 14:40 |
入場者数 : 7,200 人 |

・11月12日(土) 第一レース決勝(脇阪出走) 15:15 Start [22 Laps / 100.386 km] |
入場者数 : 23,000 人 |

・11月13日(日) 第二レース決勝(クート選手出走) 15:25 Start [22 Laps / 100.386 km] |
入場者数 : 40,500 人 |

D'STATION KeePer SC430



Drivers	Qualifying	Final
脇阪寿一	13 位	3 位



今シーズン最後のレース“JAF Grand Prix FUJI SPRINT CUP”(富士スプリントカップ)が、11月11-13日の3日間の日程で、富士スピードウェイにて開幕した。SUPER GT とフォーミュラカーレースの国内最高峰 Formula NIPPON が共催される年に一度の特別戦で、今年で開催二回目を迎える。富士スプリントカップは、その名前の通りスプリントレースが繰り広げられる。通常 2 名のドライバーで戦う SUPER GT だが、今回は予選と決勝レース 100km を 1 人で担当し、土曜日の第 1 レース、日曜日の第 2 レースをそれぞれが単独で戦う変則的なスタイル。脇阪は第 1 レースを担当する。ウェイトハンデのない「ガチンコレース」。ドライバーの力量・クルマのポテンシャルをシンプルに発揮できるこのレースで、これまでの鬱憤を晴らすことができる最後のチャンス。結果が出せず苦しんだ今シーズン。その締めくくりとなるこのレースに脇阪は並々ならぬ思いで臨んだ。

11月11日(金)

・公式練習 09:30 - 10:30 | 第一レース公式予選一回目 13:50 - 14:40 | 入場者数 : 7,200 人 |

○公式練習 | タイム 1'52.279 | 順位 : 13 位 | 天候 : 雨 | コース : ウェット | 気温 / 路面温度 12℃ / 12℃ |



朝から雨の降りしきる富士スピードウェイ。シーズンを通じて崇られている雨に、さすがにもう食傷気味だ。60 分の走行時間を 2 人でシェアし、午後に控えるそれぞれの予選に備えなくてはならない。持ち込んだクルマは事前に行われたもてぎでのテストでエンジニアと相談しながら作り上げた。

午前 9 時半、走行開始。コース上には至るところに川ができ、アクアプレーニングを起こして大変危険な状況。それでも、クルマの調子には手ごたえがあり、脇阪が 40 分ほど走行したのちクート選手と交代。最終的に 7 番手でこのセッションを終えた。

-脇阪寿一のコメント-

「クルマの手ごたえは確かだ。これも高田チーフエンジニア、溝田エンジニア、中島エンジニアが大変な努力してくれたおかげだと思う。3 人のエンジニアが、日本とドイツをつないで走らせてくれているクルマで（高田エンジニアはドイツ在住のためこのレースには残念ながら不在。そのためリアルタイムで情報共有しながら作業を進めている）、納得の行くレースをして、良い結果で締めくりたい」

○第 1 レース公式予選

| タイム 1'50.283 | 順位 : 13 位 | 天候 : 雨 | コース : ウェット

| 気温 / 路面温度 12℃ / 13℃ |



午後2時20分、第1レース公式予選が開始された。雨は止むことなく降り続けている。レインタイヤを装着してコースに入る脇阪。他車はセッション開始直後からアタックをするクルマもあったが、脇阪はタイヤを温め前のクルマとの間隔を取りアタックに臨むといういつもの通りの手順であったが、アタックラップを迎えようと言うまさにその時に急激に雨脚が強くなり、アタックを断念せざるをえない状況に陥ってしまった。つまり、予選アタックの“好機”を逃してしまったのである。満身に予選を戦えぬまま、13番手と下位に沈む結果となった。

-脇阪寿一のコメント-

「タイヤをじっくり温め、前との間隔を取り視界を確保、一番良いタイミングで臨むはずだった。タイヤのピークでアタックをするはずが、天候に翻弄されたとは言え、タイミングを逸してしまったのは自分のミス。この天候の変化は、またしても神様が自分に与えた試練と感じた。これを乗り越えることが、自分の使命なのかもしれない。明日は、今季最後のレースを全力で戦う」

11月12日(土)

・第1レース決勝 | 15:15 Start [22 Laps / 100.386 km] | 入場者数 : 23,000 人 |
順位 : 3 位 | 天候 : 晴れ | コース : ドライ | 気温 / 路面温度 16℃ / 18℃ |



決勝日は前日とうって変わって、朝から青空の広がる富士スピードウェイ。まばゆい日差しが照りつけるサーキットへは大勢の観客が詰めかけた。しかし、正午をまわると日が陰り始めてきた。通常の決勝レースよりも1時間以上開始が遅い15時15分のスタート。今大会の決勝レースは、スタンディングスタートとなるため、スタート直後のタイヤの温まり方がカギとなる。その為、気温の変化は

大変気になるところだ。各車、フォーメーションラップ開始直後から、タイヤに熱を入れるため、大きくウェービングしながらスターティンググリッドについた。今シーズンの脇阪へのさまざまな思いが去来する中、ついに今シーズン最後となる第1レース決勝がスタートした。オープニングラップの1コーナー、数台がからみ、アクシデントが発生したが、それに乗じて脇阪は9番手にポジションアップ。2周目には7番手と、その後もクルマのポテンシャルを自らの手で証明するかのごとく快走する脇阪。ベストラップを連発し、5周目には24号車をオーバーテイク、続く6周目には23号車を駆るブノワ・トレルイ工選手もオーバーテイクし、さらに10周目には同じレクサス勢の6号車、大嶋和也選手を捉え、とうとう4番手まで浮上してきた。ここまで素晴らしいレース運びを見せる脇阪だが、その前に大きく立ちはだかるのは、昨年までのチームメイトである36号車のアンドレ・ロツテラー選手だった。脇阪が最も尊敬するドライバーであり、容易にオーバーテイクできない相手であることは十分に承知している。お互いの手の内も知り尽くした旧知の仲だ。そのロツテラー選手に、当然ひるむことなく挑む



脇阪は、14 周目に背後につくと、ロッテラー選手にゆさぶりをかける。17 周目のダンロップコーナーでロッテラー選手のインに飛び込み、そのままプリウスコーナーまで並走するもオーバーテイクすることは出来ない。直後の1コーナーでもインに飛び込みコカコーラコーナーまで緊迫したバトルを繰り広げるも、ここでも抜くことは出来ない。しかし、この2回のバトルはロッテラー選手をファイナルラップにオーバーテイクするための布石であったのである。そして迎えたファイナルラップ、脇阪はコカコーラコーナーから100Rでロッテラー選手の背後にびたりとつけ、ヘアピンのブレーキングでインをつき、見事にオーバーテイク！この瞬間、ピットもホスピタリティも歓喜に沸いた。たくさんの観客を魅了し、手に汗握る攻防はとうとう終焉を迎え、D'STATION KeePer SC430 脇阪寿一は、3位でチェッカーを受け、今季初！の表彰台を獲得した。



日曜日の第2レースを担当したクート選手は、予選は残念ながら12番手と奮わず。決勝第2レースで12番手スタートから、快調にポジションアップ。終盤、脇阪同様3番手まで上がり、このままチェッカーを受けるかと思った矢先のファイナルラップ、後方から猛追して来た36号車中嶋一貴選手と接触、共にスピン。表彰台目前で6位となってしまったが、クルマのポテンシャルの高さを魅せつける

走りを披露した。

脇阪が3位、クート選手が6位と決勝レースでのD'STATION KeePer SC430の2人の快走は、GT500総合3位という形で表彰台を獲得、3日間の日程を有終の美で飾る事になった。



-脇阪寿一のコメント-



「今日のクルマは、持ち込んだままの状態でもとても速かった。下位のポジションからスタートした訳だが、このクルマを頑張って作ってくれたスタッフの為に、絶対にその速さを証明したかった。結果3位となることができ、予選をもう少し頑張っていたら…とも思う。世界で一番尊敬するロッテラー選手と一緒にレースができ、オーバーテイクできたというのは、これもレースの神様が僕に何かしてくれたのかもしれない。ドイツにいる高田チーフエンジニアと、富士にいる溝田エンジニア、中嶋エンジニアとが回線をつなぎ、その指示のもとメカニックがクルマを作り上げたのは、“仕事”を超えた高田エンジニアと自分との間に“男と男の約束”みたいなものがあって、それを形で証明できたことはうれしい。“脇阪寿一”が走れば、表彰台に乗ることができるというチームのみんなの期待をこれまで叶えてあげられなかったが、最後どうにか間に合った…そう思う」

3位という成績にこれほど喜びを感じたことはあるだろうか。優勝に匹敵するほどの価値、そしてみんなの思いが詰まった“3位”。人に元気や勇気を与えるレース、久しぶりに見た気がする。表彰式でも3位の脇阪への拍手は鳴り止まなかった。シーズン中、D'STATION KeePer SC430に華を添えてくれたレースクイーンもみな号泣、表彰式が終わったあとも涙をぬぐっていた。きっと、脇阪のファンだけでなく、サーキットを訪れていた全てのモータースポーツファンにも、何かを与えたレースだったのではないだろうか。最後にオーバーテイクした相手が、ロッテラー選手というのも、レースの神様が用意してくれていた大舞台だったのかもしれない。そして、改めて思うことは、こういう戦いを魅せられるのが「脇阪寿一」であり、また「脇阪寿一」にはこういう戦いが似合っているのだなと…。

そして、シーズン最後の感謝祭、これまでTMSF（トヨタモータースポーツフェスティバル）として親しまれて来た大イベントが、名称を新たにして盛大に開催される。TOYOTA GAZOO Racing FESTIVAL 2011！（TGRF 2011）。11月27日(日)、富士スピードウェイ（静岡県）にて開催される。今季、最後の脇阪の雄姿を見て欲しい。

TOYOTA GAZOO Racing FESTIVAL 2011 公式ホームページ

<http://www.tgrf.jp/index.html>